

2013 夏休み すいせん図書

～本の森へ～



西東京市図書館

1・2年生

「てんぐのそばまんじゅう」 深山さくら 作 長谷川義史 絵／ひさかたチャイルド
じいさまとばあさまは、あるはるの日、みねざくらのふといえだがおれて、大きなや
つではっぱがおちているのを見つめました。その日からてんぎがあかしくなり、な
つになってもちっともあつくなりません。はたけのやさいもそだちません。こまっ
いたあるばん、なんとふたりのいえにてんぐがやってきました。



「カイくんのランドセル」 おかしゅうぞう 作 ふじたひおこ 絵／佼成出版社
カイくんはもうすぐ1ねんせい。おじいちゃんとおばあちゃんが、おいわいにラン
ドセルをかってくれることになりました。つぎのひ、まちにいくと、おじいちゃんとお
ばあちゃんは、いろんないろのランドセルにびっくり。こどものときランドセルがな
かったふたりは、「こんなのがほしかった」とおもいました。



「つなみてんでんこ はしれ、上へ！」 指田和 文 伊藤秀男 絵／ポプラ社
2011年3月11日、もうすこしで5じかん目があわるところに、あのじしんはやってき
た。ゆれがすこしあさまったとき、こえがきこえた。「つなみがくるぞ！」。
“つなみ てんでんこ”みんなはたすけあいながら、上へ、上へ、はしった。



「ゆうかんうしクランシー」 ラチャー・ヒューム 作 長友恵子 訳／小学館
クランシーが生まれたとき、パパとママはとってもがっかりした。だって、自分たち
は胴のまわりが白いシロオビ・ギャロウェイ族の牛なのに、クランシーはまっ黒だっ
たから。なかまはずれにされてそだったクランシーは、シロオビもようをつけようと、
いろいろためしてみた。



「おとうさんの手」 まはら三桃 作 長谷川義史 絵／講談社
いえにかえると、「おかえり、かあり。」おとうさんは、しずかにいった。「どうして、わ
たしだってわかるの？」おとうさんは目が見えない。「かありのにおいが、するんだよ。」
わたしは、きゅうしょくのにおいだって。スパゲッティの、ケチャップのにおい。



「はじめてのキャンプ」 林明子 さく・え／福音館書店
なほちゃんはちっちゃいおんなのこです。あるひ、おとなりのともこおばさんが、お
おきいこどもたちとキャンプに行くことに。「わたしもいく！」なほちゃんがいうと、「ち
っちゃいこはおもいにもつをもってあるけないし、すぐなくし、よる、くらいとこわが
るからだーめ！」といわれてしまいました。



「アンナのうちはいつもにぎやかーアンナ・ハイビスカスのお話ー」
アティヌーケ 作 永瀬比奈 訳 ローレン・トビア 絵／徳間書店
アンナはアフリカにすむ女の子です。かぞくはおとうさん、おかあさん、ふたごの弟、
おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさんとたくさんのいとこたち。毎日とてもに
ぎやかです。ある日、かぞく5人だけでカヌーにのって旅行に出かけましたが、だんだ
んさみしくなってきました。



「セミたちの夏」 筒井学 写真と文／小学館
アブラゼミはどのように生まれるのでしょうか。木に生みつけられた卵からたんじ
ょうした小さなセミの幼虫は、まず土の中をめざします。長い長い土の中の生活のは
じまりです。そして、5年目の夏に幼虫は地上をめざすのです。



3・4年生

「犬のハナコのいしやさん」 今西乃子 文 浜田一男 写真／WAVE出版
犬のハナコの飼い主は、町の動物のいしやさん、ヒロシ先生です。10年まえ、交通
事故にあって、この病院にやってきたハナコは、うしろあしが不自由になったため前
の飼い主にすてられてしまいました。そんなハナコをヒロシ先生は、すくってくれた
のです。ヒロシ先生は、毎日たくさんの「命」をすくっているのです。



「よしこがもえた」 たかとう匡子 作 たじまゆきひこ 作／新日本出版社
わたしは一年生、妹のよしこは三歳、下の妹は生まれたばかりだった。真夜中、けたたましい空襲警報
のサイレンの音。よしことわたしはてをつないでにげていたが、ちかくで焼夷弾が炸裂して、からだをた
たきつけられ、ふきとばされた。あっ、よしこの髪の毛に火がついた！よしこはそのままころがっていっ
た。気がついたとき、そこは防空壕の中だった…。1945年7月3日、姫路空襲でおきた悲しいお話です。



「サッカーがだいすき！」 マリバス・ポルツ さく ローレン・カスティロ え MON やく／岩崎書店
シエラはサッカーがだいすきです。こんどの土曜日に、シーズンさいごのサッカー
の試合があります。ふだんはいそがしくておやすみできないおばさんが、おうえんに
来てくれることになりました。しかし、試合は雨で中止に。おばさんが次の試合におや
すみできるかわかりません。シエラはあることをおもいつきました。



「ふたりだけの運動会」 あいはらひろゆき 作 佐藤真紀子 絵／佼成出版社
リレーの選手になったことがない小学校3年生の孝太は、リレーの選手になって、
病気で入院中のお母さんを元気にしてあげたいと思いました。クラスのみんなできよ
うそうした結果、孝太はみごと、リレーのアンカーにえらばれました。ところが、運
動会の朝、お母さんはこられなくなってしまいました。



「オバケの長七郎」 ななもりさちこ 作 きむらなおよ 絵／福音館書店
古道具屋「へなもんや」の源ジイは、ある夜ゴミすて場でオバケを拾います。白くて
小さくて大福そっくりのオバケは「長七郎」と名乗りました。200年も眠っていた長七
郎は、源ジイの仕事の手伝いをしながら居候することになりました。「やなぎした商店
街」の人たちを巻き込んで、今日もゆかいな事件が起こります。



「うちはお人形の修理屋さん」 ヨナ・ゼルデイス・マクドノー 作 おびかゆうこ 訳 杉浦さやか 絵／徳間書店
アナのパパはお人形の修理屋さん。アナは三人姉妹のまん中で、優等生のお姉ちゃ
んと、甘えんぼうの妹がいます。けんかをすることもあるけど、三人はお人形で遊ぶの
が大好き。だけどある日、ヨーロッパで戦争が始まり、パパは仕事ができなくなってし
まいます。パパや家族のみんなを助けるために、アナはあることを思いつきます。



「大どろぼうホッツェンブロッツ」 オトフリート＝プロイスラー 作 中村浩三 訳 ヨーゼフ・トリップ 画／偕成社
ある日、カスパールのおばあさんのうちに、どろぼうがはいりました。その名はホッツェンブ
ロッツ、世にもおそろしい大どろぼうです。おばあさんをおどしてうばったのは、おばあさんの
だいじなコーヒーひき。カスパールはなかよしのゼッペルといっしょに、大どろぼうをつかまえ
ようとぼうけんにでかけます。つづきに「ふたたびあらわる」と「みたたびあらわる」があります。



「保存食の絵本 1 野菜」 こしみずまさみ へん かめざわゆうや え／農山漁村文化協会
野菜の保存食は、収穫が少ない冬の季節にそなえ、干したり、塩に漬けたりしたのがはじ
まり。切り干し大根、干しいたけなどの乾燥食品や、いろいろなお漬けものもあるね。だ
けど、干したり、塩漬けにすると長持ちするのはどうしてかな？保存食をつくるのに必要
なちょっとしたコツや、保存のしくみを知ってじょうずに野菜の保存食をつくってみよう！



5・6年生

「さがしています」

アーサー・ビナード 作 岡倉禎志 写真／童心社

とけいのしゃしんが、かたりかけます。「おはよう おはよう おはようございます」
ごはん^{まめ}と豆のつまったレイコちゃんのおべんとうばこは、レイコちゃんがいえなかつた「いただきます」を、いまでもさがしています。1945年8月6日のあさ8時15分広島。平和記念資料館にある展示物が、いろいろなことを教えてくれます。



「お父さん、牛になる」

晴居慧星 作 ささめやゆき 画／福音館書店

月曜日の朝家族が目覚めると、お父さんが^{たみ}畳の上で牛になっていた。どうしてそうなったのか？
だれもわからないまま、お母さん・お姉ちゃんとほくはお父さんの世話を始める。エサをあげ、フンのしまつをするのは大変だし、会社や近所のおばさんからはいろいろ言われるし、ほくたち一家は牛のお父さんに^{やまなし}ふり回される。そんななか、山梨のおばあちゃんが来ることになった。



「糸子の体重計」

いとうみく 作 佐藤真紀子 絵／童心社

おいしいもののことを考えるのが好きで、食べることはもっと好き。どんな^{イヤ}嫌なこと
があっても、へこんでても、おいしいものを食べると、幸せ！って思える—そんなちよつと^{いとこ}太めの糸子が、クラスメイトとのダイエット勝負^{しあわ}を受けてしまった。夏じゅうに約9キロの減量に成功しなければ糸子の負け。だけどおいしいものの誘惑はたくさんあって…。



「林業少年」

堀米薫 作 スカイエマ 絵／新日本出版社

祖父が林業を営む大沢家の長男・喜樹は、小学五年生。祖父の^{しやうぞう}庄蔵は、お金のかかる林業を続けているため、家族から「金食い虫」と陰口を叩かれて^{りんか}いるが、林家としての^{ほこ}誇りをもっていた。ある日、百年杉の伐採の場に立ち会った喜樹は、その^{はくりよく}迫力に^{どぎも}度肝を抜かれた。「今度はお前が山を育てる番だぞ。」喜樹には、庄蔵の目が、そう言っているように思えた。



「発電所のねむるまち」

マイケル・モーパーゴ 作 杉田七重 訳 ピーター・ベイリー 絵／あかね書房

友達につきとばされてけがをしたマイケルを手当してくれたのはミセス・ペティグラー。海辺の湿地に置いた客車にすむ、ペティグラーさんと親しくなったマイケルは、彼女の口バに乗り、犬たちと湿地をかけまわった。ところがある日、この“ペティグラーさんの湿地”に巨大な原子力発電所の建設計画が持ち上がる。



「雨あがりのメデジン」

アルフレッド・ゴメス＝セルダ 作 宇野和美 訳 鴨下潤 絵／鈴木出版

小屋のような家がびっしり立てこみ、迷路のようにいりくんだ路地がめぐるコロンビアのメデジン。そこに住む十歳のカミーロの家はまずしくて、学校に行かず、友だちのアドレスと過ごしていた。最近、町にりっぱな図書館ができた。図書館に興味があったが、お金のないカミーロには用のない場所だと思っていた。しかし図書館に足を踏み入れたカミーロにやさしそうなおねえさんが声をかけてきた。



「なぜカツラは大きくなったのか？—髪型の歴史えほん—」

キャスリーン・クルル文 ピーター・マロン絵 宮坂宏美訳／あすなろ書房

みなさんはカツラがいつ生まれたか知っていますか？今から約5000年前、エジプトで日差しから頭を守るために初めて誕生しました。こどもがカツラをつけたり、反対にカツラが禁止されたりした時代もあります。他にも、毛生え薬はいつからあったのか、どんな髪型が流行っていたのか、髪にまつわるいろんな秘密がいっぱいの本です。



「はじめましてモグラくん—なぞにつつまれた小さなほ乳類—」

川田伸一郎 著／少年写真新聞社

みなさんはモグラを見たことがありますか？ほとんど土の中にいるので、モグラにはなぞがいっぱい。どんな生き物？目は見えるの？トンネルの中はどうなっているの？この本では、モグラの一日やしっぽの役割、食事の方法、子育てなど、モグラ専門の研究者がなぞに満ちた生態を、ていねいに解説しています。また、最後にモグラ情報館のページがあって、どこに行けば会えるかもわかります。

